香川大学　大学教育基盤センターニュース

No.19　　令和6年12月

Higher Education Center
Kagawa University

香川大学　大学教育基盤センター
〒760-8521　高松市幸町１－１
Tel　087-832-1151～1154
Fax　087-832-1155
https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/

目　　次

１．第71回中国・四国地区大学教育研究会報告…… 1

２．よりよい授業のためのFDワークショップ報告…… 6

３．創造的科目支援育成事業の報告…… 9

４．注目のFDのご紹介…… 12

５．全学共通科目の授業公開報告…… 13

６．新スタッフからの一言…… 15

1. 第 71回　中国･四国地区大学教育研究会報告

中国・四国地区大学教育研究会が、令和 6 年 6 月 15 日（土）に開催されました（当番校愛媛大学、オンライン）。この研究会は、大学等での教養教育を主題的に扱うもので、今年で 71 回目となります。メインテーマ「教養教育の未来」のもとで、基調講演・講演・ディスカッション及び分科会が執り行われました。以下、研究会の様子を、参加した本学教員が報告します。

■基調講演

倉敷芸術科学大学学長の柳澤康信先生より､「教養教育の今後のあり方とそれを展開させるための体制づくり」と題して基調講演がございました。そのアウトラインは、日本における「教養教育」小史、大学設置基準の大綱化と「教養教育」その後、について振り返った後、大学教育改革の実践として、柳澤先生が携わってこられた、倉敷芸術科学大学、岡山理科大学、愛媛大学の事例を紹介するといったものでした。報告者が最も印象に残ったのは、日本における「教養教育」小史の中で説明いただいた、「一般教育学会、中国・四国地区大学一般教育研究会の年譜」です。現在、大学教育に関するパイオニア的存在として活動しているのが、大学教育学会です。大学教育学会の前身である一般教育学会が発足したのが、1979 年。それに先んじて、中国・四国地区大学一般教育研究会は、1953 年に、九州・四国・中国地区大学一般教育研究会から分離独立したとのことでした。1953 年から数えはじめると今年（2024 年）は 71 回目の開催となります。その歴史に改めて驚くと共に、研究会発足時の先人たちの熱意に触れ、本研究会や香川大学全学共通教育の未来をどのように描くか、考えるためのきっかけにしたいと思いました。　　（文責：西本佳代）

■講演

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の上月翔太氏から『教養教育としての未来思考―同大学「未来思考支援科目」の取組を通じて』と題した講演が約 50 分にわたって行われました。講演では、同大学の「共通教育カリキュラム」における「初年次科目」、「基礎科目」、「教養科目」等に並ぶ一つの「科目群」として位置付けられている「未来思考支援科目」の総括的な紹介がなされました。特に、「未来思考支援科目」の実施にあたって、「未来」という言葉の意味やこうした概念が持つイメージや印象に関しては、当該科目を履修することになる受講生をはじめ、教員にとっても様々であること、社会の中でも「未来」、「思考」といった言葉が流行っていることについての背景も指摘されました。そして、教養教育（一般教育）の改革論議において長くディスカッションされてきた同大学における「共通教育と専門教育（大学院課程まで含む）」のバランスの問題、また、正課教育（授業）での学習に加え、学生の社会生活を含む広い意味での大学教育における（教養教育）カリ

キュラムをいかに構築していくのかについても論点として挙げられました。

なお、同講演後に文責者が情報収集したところでは、以下の〔参考情報〕にあるウェブサイトにおいて、「未来思考支援科目」の概要について関連情報が掲載されています。よろしければ、適宜ご覧ください。（文責：蝶慎一）

※〔参考情報〕 以下は、文責者の情報収集による。（2024 年 6 月 15 日最終確認）
・愛媛大学教育・学生支援機構共通教育、「未来思考支援科目」、愛媛大学　教育学生支援部教育センター事務課共通教育チーム（http://web.iec.ehime-u.ac.jp/curriculum6.html）

■人文・社会科学、自然科学分科会

「条件・工夫・課題の観点からの授業事例の共有」というテーマで、荒見泰史先生（広島大学：中国文学）、齊藤貴弘先生（愛媛大学：ギリシア史）、齊藤隆仁先生（徳島大学：物理学）の三名より報告いただきました。報告の前提として、企画側が①授業実施の条件（学生数、教員数、教室数、カリキュラムにおける位置づけ等）、②それに対する工夫、③そこから生じるさらなる課題、という三つのポイントを設定しており、まずこの方法に学ぶところがありました（往々にしてこの種の分科会は、事例の共有で終わってしまうことがありますので…）。それぞれの先生がコロナ禍のなかで得られたノウハウを、対面授業再開後でもうまく活用している点が印象的でした。工夫として、収録した動画を復習用に活用する、スライドを動画のなかに埋め込むことで臨場感を生み出される（荒見先生）、「宗教」、「政治・戦争」などの普遍的なテーマを設定して、自分の専門分野に関わる事例を一つのケースとして提示すると、世界史のレディネスのない学生も積極的に取り組んでくれる（愛媛の斉藤先生）、③高等学校での物理の学びを振り返ることで、大学の物理を理解するにあたって躓きになるポイント（高校ならではの学び方）を確認することができる（徳島の斉藤先生）、といったものがありました。質疑でも問題となりましたが、動画の作成等には一定のスキルが必要であるため、先進事例とともにスキルをどのように共有するか、という点も課題であると、改めて思いました。（文責：佐藤慶太）

■情報教育分科会

本年度の情報教育分科会では、「時代の変化に即した情報教育の実現」というテーマの下、BYOD、コロナ禍での遠隔授業、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム、DX、生成 AI、高校での情報 I 必修化など、多様な要因による情報教育の変革に焦点が当てられました。私が報告した「香川大学における数理・データサイエンス・AI 教育（リテラシーレベル）の 4 年間の成果報告」では、このプログラムの進展と具体的な成果を共有しました。檀裕也先生（松山大学経営学部教授）による「初年次教育における映像制作グループワークを通じた実践学習と教育効果」では、BYOD を取り入れた初年次教育の一環として映像

制作を通じた学びの有効性が示されました。裏和宏先生（愛媛大学デジタル情報人材育成機構データサイエンスセンター講師）ならびに原本博史先生（愛媛大学教育学部准教授）による、「愛媛大学における情報リテラシー入門の歴史的変遷」と「データリテラシー教育の現状と展望」では、愛媛大学の情報教育の継続的な進化と未来への展望が詳細に説明されました。これらの報告を踏まえ、分科会全体で情報教育の質の向上と革新を目指す活発な情報交換が行われました。（文責 : 藤澤修平）

■外国語（英語）分科会

愛媛大学教育・学生支援機構の中山教授の司会進行により、外国語合同分科会が Zoom ミーティング形式で行われました。

外国語（英語）に関する発表は、第 3 及び第 4 の発表でした。第 3 の発表は、愛媛大学法学部の早田講師による「学生とともに成長するカリキュラム : 愛媛大学法文学部『専門共通英語』の 5 年間」でした。2016 年に、愛媛大学法学部では「専門共通英語」という授業が導入され、2 年次の学生は様々なテーマとした英語科目を受講できるようになりました。発表者は「専門共通英語」に伴う効果や課題を報告しました。この授業は学生には好評であり、学生のニーズに応じた授業でした。

第 4 の発表は、川崎医療福祉大学マネジメント学部の小崎准教授による「多職種連携を意識した初年次英語教育 －医療福祉教育系学部生の授業実践－」でした。発表者は、医療福祉教育系の専門職を養成する大学として、多職種連携を意識した初年次英語科目の実践報告について述べました。授業では、複数の学部・学科の学生が同じクラスで少人数のグループで医療福祉のテーマに関するポスターを作成し、発表する活動を行いました。活動後のアンケート結果から、発表活動は、自らの専門職種や他の職種について知るきっかけとなり、自己理解及び他者理解を促す効果があることが示され、多職種連携の意義を考える貴重な機会となり得ることが示唆されました。（文責 : Willey, Ian David）

■外国語（初修）分科会

1 池貞姫教授の発表テーマは「未来につなげる初修外国語教育の可能性」であり、愛媛大学における 2016 年度改組以降の共通教育並びに専門科目としての初修外国語教育の現状について報告しました。愛媛大学の共通教育における「初修外国語」のクラスは、ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語を提供しています。(法文学部昼間主コースの場合は、専門入門科目の「基礎外国語」といいます)。

2 愛媛大学モヴェ・エリック准教授は「愛媛大学における第二外国語としてのフランス語 — 状況と展望」を課題とし、コロナ禍の結果としての外国語対面学習における新テクノロジーの急速発展・使用について懸念の考えを披露しました。そして、モヴェ准教授は大学の外国語教育について哲学的視点を述べました。すなわち、人間のコミュニケーションは、バーバル、ボーカル、ノンバーバルという、3 つの重要の分離できない要素に基づいてい

ますが、教育者の義務はその 3 つの要素を是非保存確保すべきであると強調しています。

（文責：Neumann Florian）

■日本語・日本事情分科会

「教養教育としての日本語・日本事情：その課題と展望」をテーマとして以下 3 件の報告が行われました。

1.「日米オンライン共修授業　3 年間の実践報告」蕪木 絵実氏（鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 国際交流センター 助教）

2.「国際共修型授業について考える　―日本人と留学生の合同授業の実践例を中心として―」中園 博美氏（島根大学 外国語教育センター 准教授）

3.「愛媛大学　J-support 活動の実践報告　―初中級レベル以上漢字クラスでの実践を中心に―」髙橋 志野氏（愛媛大学 国際連携推進機構 教授）

内容はそれぞれ、グローバル科目を履修する日本人学生と日本語副専攻のアメリカ人学生がオンラインで行ったプロジェクト型授業、留学生の日本語授業と日本人学生の異文化理解授業の合同実施、日本人学生と地域住民から成るサポートグループによる留学生の学習支援と交流についての報告でした。これらを通じ、語学への苦手意識払拭、モチベーション向上、相互理解、仲間意識醸成等が見られた一方で、担当教員の指示徹底の難しさ、成果をどう数値化して示せるか、といった課題も出されました。残念ながら十分な議論の時間はとれず、これらは参加者個々に課された宿題となったと理解しています。

（文責：塩井実香）

■保健体育分科会

テーマ：教養教育における保健体育科目の役割と価値

保健体育分科会では大学生の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現に向けた資質・能力の育成に向けて、教養教育のなかで保健体育科目はどのような役割を果たすことができるのかをテーマに愛媛大学と香川大学の取り組み事例の報告がありました。

最初に愛媛大学日野先生より、愛媛大学では初年次科目「スポーツ」が全学必修として位置付いており、スポーツ実践を通して身体的教養やスポーツ実践力の育成を行っています。E-Fit「愛媛大学版フィットネスプログラム」や共通のハンドブックなどを作成して、授業内容の標準化を図るなど質保障に努めてきました。しかし、コロナ禍の影響や教員（非常勤講師を含む）の削減などで、現状の授業形態を維持していくことが難しい状況になってきています。また、運動・スポーツの価値観も多様化しており、スポーツ実践の内容も見直していく時期にきています。そうした状況を踏まえ、令和 7 年度からは、授業の効率化を図りながらスポーツ関連科目の改革に取り組もうとしています。（例．15 コマ 1 単位の授業からスポーツの実践と教養を盛り込んだ 8 コマ 2 単位の授業へ）との報告がありました。次に香川大学の石川が、香川大学ではこれまでの取り組みのなかで、シラバスに健康スポーツ科目の開講授業間で統一性のある記述をするようしたこと。その内容の中心は

「スポーツ技能や技術向上を目指すだけでなく、授業を通じた人間関係形成の場（コミュニケーション能力、リーダーシップ能力等の養成）として授業を提供すること。また、受講学生が主体的・共同的な学びができるようにグループ編成・授業中の話し合い等を積極的に取り入れ、受講学生間の活発なコミュニケーションができるような内容を担当教員に考えてもらっていることを報告しました。加えて大学におけるスポーツ実技授業の内容についても例示しました。

2 大学の報告後、短時間ではあったが質疑応答、意見交換等が行われました。

（文責:石川雄一）

2. よりよい授業のための FD ワークショップ報告

■日時：令和 6 年 9 月 19 日（木）13:00～17:15
■場所：幸町キャンパス 5 号館 2 階 523 教室
■受講者：5 名（新任教員研修プログラム対象者のうち、参加申込者）
■講師：大学教育基盤センター 主担当教員（蝶慎一、西本佳代、佐藤慶太）

本学で開催を予定していた SPOD フォーラム 2024 における「シラバス・授業を改善しよう！」（8 月 28 日（水））が台風 10 号による悪天候等で中止となり、9 月 19 日（木）午後、幸町キャンパス 5 号館 2 階 523 教室において「シラバス・授業を改善しよう！」を開催致しました。これは、例年、「よりよい授業のための FD ワークショップ」として 8 月下旬に 2 日間の日程で新任教員研修プログラムの受講対象者に対して実施しているものです。主な講師は、大学教育基盤センターの主担当教員が務めています。今回の受講者数は 5 名で、学部や拠点等の多様な新任教員の皆様に対面で参加いただくことができました。

内容は、下記のスケジュールの通りです。まず、受講者には受講するにあたって、事前に授業の準備・実施等に関わるシラバスや学習評価、アクティブラーニングに関する動画を視聴いただき、それらで学んだ内容を十分に踏まえて自身のシラバス、詳細版シラバスを作成し、事前提出を頂きました。そして、当日には、ルーブリック評価表を用いた自己採点&修正、受講者によるシラバス・詳細版シラバスの発表を行いました。その後、詳細版シラバスを使った授業計画案（第 1 回）の作成を行った上で、授業計画案の説明、模擬授業を行う時間を設け、受講者どうしでもコメントをし合う機会をつくりました（写真参照）。

また、受講者によるシラバスや模擬授業に関するテーマとしては、「大学生活と健康習慣」、「緩和医療学」、「情報セキュリティ」、「授業実践論」、「物理学概論」が挙げられ、各受講者から実際の授業のような新鮮で活発なやり取りや、前述の事前動画の内容を念頭に置いた工夫も試みた発表もありました（写真参照）。

【スケジュール】

時間	主な内容	主な講師・発表者
13:00～13:20	はじめに・アイスブレイク	西本佳代（大教センター）
13:20～13:35	**動画のふりかえり**	蝶慎一（大教センター） 佐藤慶太（同上） 西本佳代（同上）
13:35～13:50	**ルーブリック評価表を用いた自己採点&修正**	参加者 5 名
13:50～14:50	**受講者によるシラバス・詳細版シラバスの発表（受講者どうしのコメント）**	参加者 5 名
14:50～15:00	おわりに（前半）	西本佳代（大教センター）
15:15～15:20	はじめに（後半）	蝶慎一（大教センター）
15:20～15:50	**詳細版シラバスを使った授業計画案（第 1 回）の作成**	参加者 5 名
15:50～17:05	**受講者による発表（授業計画案の説明、模擬授業、受講者どうしのコメント、講師からのフィードバック）**	参加者 5 名 蝶慎一（大教センター） 佐藤慶太（同上） 西本佳代（同上）
17:05～17:15	おわりに	佐藤慶太（大教センター）

（注）休憩時間は除く。

そして、開催場所の 523 教室には、受講者 5 名に事前アンケートの設問として「授業をする上で、悩んだり困ったりしていること」をうかがい、それらの「回答」を教室の壁に貼り付け、休憩時間や終了後に受講者に見てもらうようにしました。一例を挙げれば、ある受講者から「年度が進むごとに自学自習頻度が下がっている傾向が見られる」とのご質問がありました。その「回答」として、講師から「なぜ『年度が進むごとに自学自習頻度』は低下するのでしょうか。学部によっては、国家試験や教員採用試験、公務員試験等の各種試験でむしろ「自学自習」が増加している学生もいると思います。ご担当の授業等には、どのような学部、学年、専門分野などの受講生が多いのか、それらの特徴を丁寧に理解し、ご指摘の授業前後の「自学自習」を促していくことが必要かもしれません。真摯に受講生と向き合うことが大切になります。」との助言・コメントがありました。（写

真の背景を参照)。

引き続き、受講者の質問や疑問に寄り添った研修サポートや支援体制が組めるように進めて参ります。なお、受講者から当該研修に関連する書籍や FD に関する情報提供のご希望をいただいたことから、他大学等の公式ウェブサイトで FD に関するリンクを取りまとめたファイル（「ひとりで FD リンク集」）をお送り致しました。

最後に、大学教育基盤センター長、主な講師、受講者全員で記念撮影を行いました（前ページの写真参照)。受講者には、今回のシラバス・詳細版シラバスの作成経験や、模擬授業で受講者どうしでのコメント等で得られた知見を今後担当される授業や教育活動で存分に活かして頂けましたら幸いです。（文責 : 蝶慎一）

3. 創造的科目支援育成事業の報告

■①前期集中特別主題（地域）実践型科目「キャリアデザインと地域貢献 A」／②後期特別主題（地域）実践型科目「キャリアデザインと地域貢献 B」
受講生数：①31 名、②20 名
授業担当者：原瑞穂（キャリア支援センター・特命准教授）

□概要：企業・団体の方から直接話を聞き課題解決ワークに取組みます。社会の変化に対応できる創造力と主体的な行動力を身につける授業です。
□採択科目の創造性：本科目は、地域や全国的に活躍する企業（団体）6社の話から業界や企業情報を得るとともに、提示された課題に対し新規企画を考えて提案します。これをグループ活動によって行い、企画のプレゼンテーション、評価、フィードバックを行う内容です。その間、学生はTeamsやGoogleFormなどのツールを駆使し、相互の情報交換を授業内外で行います。このようにして、学生が日本や地域及び企業の現状を知り、課題についてSDGsなどと紐づけて考えながら解決方法を見つけ、メンバーと協働しながら模索することを通して、仕事の疑似体験が可能となります。期待される効果として、企業担当者のグループワーク参画によって、社会人とのコミュニケーション力の向上が期待できるとともに、学生は、対人関係構築力、企画力、発信力、リーダーシップなどの社会人基礎力の一部を身につけることができます。
□実施内容と成果：教育効果の測定のため①定量的調査（自尊感情、自己効力感、キャリアデザイン力、汎用能力、進路選択に対する自己効力を測るアンケート調査）と、定性的調査（振り返りとしてOPPA（One Page Portfolio Assessment：堀哲夫，2013））を実施しました。自己効力感尺度は市販の尺度GSESを使用し、上記の他に、基礎力確認シートを使用しました（筆者作成）。「キャリアデザインと地域貢献A」（夏季集中授業）の調査結果を以下に示します。
＜定量的調査の結果＞
　授業後には、自尊感情、キャリアデザイン力、汎用能力、進路選択に対する自己効力の向上が確認できました。自己を肯定的に捉えられるようになることは、その後の学生生活に対する積極的な行動に向かう動機づけになり、積極的な行動による経験から身につけた自信は、その後のキャリア探索行動に踏み出す力となると考えられます。
＜定性的調査の結果：学生の振り返り内容（OPPA）＞「キャリアデザインと地域貢献A」
　学生の記述内容を分類しました。学生の記述の一部を以下に示します（斜字）。記述をそのまま使用したものと要約したものがあります。
1. **成長実感**：*「小さいけど自分の成長を感じることができた」、「頑張って良かった。努力の成果が出ていたと胸を張って言える」、「自分なりに役割を持ちチームに貢献することができ、自信を持てた」、「他人の意見を尊重することの大切さを深く学ぶことができた」*
2. **視野の広がり**：*「自分がしたい仕事について考え直すことにより、また企業について調*

べてみようと思うことができた」

3. **大学生活の目標**：*「大学における生活目標をどんな小さなことでも定めて取り組んでいきたい」「自分に足りていない基礎力を見つけることができた」*

4. **能力向上**：*「発言スキルや協調性が上がった」、「経験を通じて思考の仕方を整理できたのは大きな変化だと思うし、今後様々な場面でプラスに働くと思っている」*

5. **キャリア意識の変化**：*「1年生からまだ先だと学生気分でいたが、思ったよりも将来について考え、動き出す期限は迫っていて、自分はそれをする必要があると強く感じた。現実から目をそらし続ける訳にもいかないなと思うようになった」、「私は自分らしくいられるかをキャリア形成で大事にしていこうと思っていたが、生涯を描けるのであれば必要な項目が増えた。自分のやりたいことばかりではダメだと思った」、「キャリアに対する考え方が、流れに身をまかせるのではなく、自分から積極的に参加して地固めするべきだという風に変わっていった」*

6. **グループワーク**：*「他者との関わりが自己形成のために一番深く関係し、大きく成長させてくれるものである」、「仲間と協力して答えのない問に立ち向かっていくという経験は非常に新鮮で面白かった」、「グループワークに自信を持つことができた」*

以上、定量的、定性的調査の結果から、本授業の受講によって、自己の成長を確認することで自尊感情や自己効力感が向上し、大学生活の目標設定などに対する積極的主体的な関与への意識が高まること、自己理解の深まりや視野の広がりによって、幅広い職業探索意欲が高まること、グループ活動によってグループ活動に対する自信が向上するとともに自己理解が深まることが示されました。何より効果が見られたのはキャリア形成に関する意識の向上です。現時点の自身のキャリア意識の低さを自覚し、今後のキャリア形成について考え始める者が多く見られました。このことから、受講後も主体的にキャリアを考える必要性を理解し自ら行動に移す可能性が感じられました。この結果は、初年次のキャリア教育ばかりでなく、過年度生に対するキャリアに対する意識の再構築にも効果があると考えられます。このように本授業は、学生のキャリア形成に対する意識の醸成やキャリア探索行動への積極的関与の側面から、一定教育効果が得られたと考えられます。

「キャリアデザインと地域貢献 A・B」の風景

□今後の課題：今後の課題としては、年々多くなる過年度生と初年次生が混在するクラスで、個人がそれぞれの成長を感じられるようなプログラム内容を構築することです。なお、「キャリアデザインと地域貢献Ｂ」は現在継続中であるため、終了後分析を行う予定としています。（文責：原瑞穂）

4. 注目の FD のご紹介

■名称：令和 6 年度「授業について考えるランチセミナー」
■開催日時：令和 6 年 4 月～令和 7 年 2 月（毎月 2 回、木曜 12:05～12:50）
■開催方法：オンライン（Zoom）開催
■主な講師：徳島大学・高知大学・香川大学の FD に関係する教員

令和6年度より大学教育基盤センター能力開発部が中心となり、徳島大学・高知大学・本学共催で「授業について考えるランチセミナー」が開始されています。このセミナーは、ポストコロナ時代におけるオンラインを通じたFDのニーズの高まりを見据え、新規のFD、そして、新任教員研修プログラム（選択）の一つとしても整備を進めてきた取組です。さらに、徳島大学・高知大学との共催で実施しているSPOD開放プログラムでもあり、近隣の国立大学のFDの講習を気軽に受講できる絶好の機会になります。**これまで本学から約70名**（令和6年度4月からの延べ人数、10月9日カウント時点）**の教職員の皆様に受講いただき、新任教員研修プログラム対象者については12名の教員**（令和6年度4月からの人数で重複を除く、10月9日カウント時点）**が参加されています。**対面でのFDは、幸町キャンパスで開催される場合がありますが、このセミナーは、オンラインで開催時間も平日木曜のお昼（12:05～12:50）で参加しやすく工夫しています。

11月は、「複数の方法を組み合わせた多面的な学習評価の提案」、**本学がメインで担当する12月は、「学生支援の動向と体制づくり―障害学生支援に焦点を当てて―」です。**そして、年始の1月は、「学生の学習を促す試験問題・レポート課題の作り方」、2月は、「障害学生に対するキャリア支援」と多彩なテーマやトピックスが提供される予定です。ぜひ教職員の皆様には、まずは一度ご受講を頂けましたら幸いです。

【「授業について考えるランチセミナー」申込情報・URL】

https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/teachers/spod/

（文責：蝶慎一）

5. 全学共通科目の授業公開報告

令和 6 年度、全学共通科目では 6 月～9 月に以下 6 科目で授業公開を実施しました。

■授業科目名：大学入門ゼミ T（1）「大学入門ゼミ」
■日時：令和 6 年 6 月 5 日（水）3 コマ
■場所：422 講義室（幸町北キャンパス 4 号館 2 階）
■担当教員：石塚昭彦、山中隆史（創造工学部）
■内容：オムニバス形式で「大学で何を学ぶべきか」を各教員の体験談や研究教育の紹介を交えた講義
■履修者数：25 名

■授業科目名：学問への扉「自然科学へのいざない」
■日時：令和 6 年 6 月 6 日（木）5 コマ
■場所：525 講義室（幸町北キャンパス 5 号館 2 階）
■担当教員：鶴町徳昭、井面仁志、堤成可、竹之内健介（創造工学部）
■内容：総合の質疑応答とまとめ
■履修者数：25 名

■授業科目名：学問基礎科目(文系科目)「社会学 B」
■日時：令和 6 年 6 月 18 日（火）2 コマ
■場所：822 講義室（幸町北キャンパス 8 号館 2 階）
■担当教員：河合史子（教育学部）
■内容：質的データを分析する
■履修者数：54 名

■授業科目名：主題科目「AI 時代の学校教育論」
■日時：令和 6 年 6 月 20 日（木）5 コマ
■場所：523 講義室（幸町北キャンパス 5 号館 2 階）
■担当教員：神野幸隆（教育学部）
■内容：前半：約 30 万人の不登校問題の原因と解決策を学校制度に着目しながら分析したり、各自が資料を持ち寄ったりしながら、少人数で変わるべき公立学校を議論する。
後半：初回の講義において全 7 回で進める個人探究テーマを設定してくる課題を受けて持ち寄った問いをどのように絞っていくのかについて説明し、その後、各自がリサーチ・クエスションの桁までブラッシュアップをかけ、焦点

化した問いへと更新を図る。

■履修者数：30 名

■授業科目名：高度教養教育科目「ヒューマニティーズプログラム課題研究　イ」

■日時：令和 6 年 6 月 27 日（木）18:00～19:30

■場所：DRI 棟　E31（幸町南キャンパス総合教育棟 3 階）

■担当教員：佐藤慶太（大学教育基盤センター）、ウィリー・イアン・デビッド（同）、蝶慎一（同）、ノイマン・フロリアン（同）、マクラハン・ジェラディーン（同）、唐澤晃一（教育学部）、小西憲一（同）、平篤志（同）、三宅岳史（同）、守田逸人（同）、緒方宏海（経済学部）、園部裕子（同）、湯浅翔馬（同）

■内容：「ヒューマニティーズプログラム課題研究」は、ネクストプログラムの一つである「ヒューマニティーズプログラム」の登録者がプログラムの仕上げとして、自分でテーマを設定し研究を進める授業。今期の課題研究履修者は 2 名、二人とも「地域研究」の分野で研究を進め、中間発表会は、研究内容のブラッシュアップの機会と位置づけている。

■履修者数：2 名

■授業科目名：高度教養教育科目「ヒューマニティーズプログラム課題研究　イ」

■日時：令和 6 年 9 月 5 日（木）15:00～17:00

■場所：DRI 棟　E31（幸町南キャンパス総合教育棟 3 階）

■担当教員：佐藤慶太（大学教育基盤センター）、ウィリー・イアン・デビッド（同）、蝶慎一（同）、ノイマン・フロリアン（同）、マクラハン・ジェラディーン（同）、唐澤晃一（教育学部）、小西憲一（同）、平篤志（同）、三宅岳史（同）、守田逸人（同）、緒方宏海（経済学部）、園部裕子（同）、湯浅翔馬（同）

■内容：今回の授業公開は、上記授業の最終発表会にあたり、最終発表会は、研究内容のブラッシュアップの機会と位置づけている。

■履修者数：2 名

６. 新スタッフから一言

大学教育基盤センター特命講師　　Broxholme　James

2024 年 10 月 1 日より大学教育センター特命講師を拝命いたしました。私は 2019 年から香川大学で大学教育基盤センターと創造工学部の非常勤講師として勤務しています。これらの職務に就く前は、香川県で英会話教室を経営し、イギリスで公務員として勤務していました。

私は認知言語学、心理言語学、脳に優しい関連の教授法やアプローチに強い研究関心を持っています。私の使命は、大学の英語教育の授業でより深い学びを促し、学習者の英語流暢性の向上に貢献することです。このミッションのために、脳に優しいツールやテクニックを教室に導入し、生徒にとって有益なベストプラクティスを実践していきたいと思っています。また、このような研究分野で有益な研究ポートフォリオを構築し続け、大学にとって有益なものとなることを期待しています。

原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援課）までお願いします。